死にゆく人をめぐるポリティックス：医療における真実告知

宮地尚子

はじめに

癌など重篤な病気に陥った患者に、真実の病名や治る見込みなどを伝えるべきかどうかといういわゆる「告知」の問題について、私はここ数年研究を続けてきました。

もとはと言えば、自分が医師となってから臨床場面で、告知をしないまま患者さんをみとってきたことに対するわだかまりに、どうにか決着をつけたいという思いがありました。本当のことは言わない方がいいという「常識」はどこからきたのか、患者さんを作り話でだまし、家族と口裏を合わせて演技を続けることを、自分はどう正当化すればいいのか……。

さまざまな文献を読み、留学を機会に、告知が広く行われているといわれるアメリカでその状況を探り、医師達にインタビューを行い、帰国後はあらためて日本での状況をみなおし、日本の医師達にインタビューを行いました[1)]。そういった過程の中で、私の問題意識はどんどん変わっていきました。

はじめの頃は、告知をするのがよいのかよくないのか、どうすれば望ましい告知ができるのか、そんな臨床的、実践的な関心が中心でした。けれど徐々に、そもそも告知問題ってなんなのか、なぜ問題になるのかといったことを考えるようになり、そこでの専門職制度の役割とか、専門家と素人との関係、知識のあり方に関心がおよび、また「家族」「死」「思いやり」「善意」「信頼」「感情表出」「権力」といった基本的な概念をほりおこす作業につながっていきました。

それは、既存の告知に関する言説にひそむ暗黙の前提（神話といってもいいものもあります）を一つずつ壊してゆく過程でもあり、同時に「医師らしさ」を身に付けようとがんばってきた自分の、医師としての「社会化」の過程を、逆に辿っていく試みでもありました。

そろそろ研究の終着地点に近くなった今、私の中で明らかになってきたことは、「告知問題」というのは優れて現代社会の問題なのだということ、今の社会や文明の在り方、その中で文化的に修飾された生や死の扱いかた、様々な人間関係のありかた、そして知と権力の問題であるということです。

ここでは、私がなぜそう考えるようになったかといった過程を飛ばして、今いきついている限りの結論らしきものをまとめてみたいと思っています。随所でどうしてそう解釈し断定するのかという疑問が出るかもしれませんが、根拠となる調査データや分析過程については、文末